

東日本震災復興支援に学ぶエシカルファッション教育

—ふくしまオーガニックコットンプロジェクトの事例から—

A Study of the Ethical Fashion Education to support for reconstruction after the Great East Japan earthquake

—A Case of Fukushima Organic Cotton Project—

平川 すみ子

Sumiko HIRAKAWA

Abstract

Three years are going to pass since East Japan great earthquake, but the way of the recovery from damage is still far. Among three prefectures of Tohoku, there are the most victims continuing life as an evacuee with 140,000 people in Fukushima. This is because it can get neither the damage of the tsunami nor the radioactive contamination of the nuclear power plant under control.

Following "Tohoku cotton project" of Miyagi of the last year, I researched Fukushima organic cotton project. I consider an action to lead to the ethical fashion education from earthquake disaster revival and support to industrial development. I want to establish point of view of the education for sustainable development in fashion through it, in the year when ESD UNESCO world meeting is held in Nagoya.

Keywords：震災復興、産業振興、6次産業化、エシカルファッション、ESD：持続可能な開発のための教育

1. はじめに

2011年3月11日の東日本大震災から3年が過ぎようとしているが、被災地の復興の道のりはまだ遠い。

2012年8月、宮城県での「東北コットンプロジェクト」の調査で、当時まだ手つかずであった破壊された農業灌漑設備や、放置され除草剤をまかれた茶色い農地を目の当たりにした。広大な仙台平野は、半分以上が荒涼としていた。



図 1-1 未整備の灌漑水路
仙台市若林区荒浜（2012.8.3 筆者撮影）

今回調査した福島県いわき市も、いまなお薄磯地域には住宅が流された後のむき出しの住居の土台が残り、廃校



図 1-2 薄磯の住居跡地
いわき市薄磯（2013.11.22 筆者撮影）

になった小学校の校庭には小山のように瓦礫が積み重なっていた。案内してくれた NPO の方は「当初に比べかなり減った」と説明してくれたが、今でも校舎の 2 階以上の高さがある。しかも、撮影のため筆者が近づこうとしたら、「瓦礫は放射能残留濃度が高いので近づかない方が良い」と注意された。津波はこの校舎の 3 階にまで達したが、児童は裏山に逃げて無事だったと言う。塩屋埼灯台に近く、いわき市で最も客の多かった「薄磯海水浴場」は、震災以降は放射能汚染のため遊泳禁止となっており、人影もない。足

跡一つ無い美しい砂浜に、一層無残さを感じた。



図 1-3 廃校の校庭に積み上げられた瓦礫
いわき市薄磯 (2013.11.22 筆者撮影)

2. いわき市における被災者の現状と問題点

福島は東北3県のうちで、避難生活を続ける被災者が約14万人と一番多い。福島民友新聞によると「県内で避難生活を送る被災者は8万9947人で、避難先の内訳は借り上げ住宅が最多の5万2388人、次いで仮設住宅2万8846人、公営住宅1222人など。」¹⁾である。津波の被害もさることながら、東京電力福島第1原発事故の放射能汚染が收拾できていないためである。今回取材をしたNPO法人「ザ・ピープル」理事長の吉田恵美子氏によると、いわき市内の仮設住宅3500戸のうち3300戸は原発事故避難者が占めるという。

その現実には数字に裏付けられている。河北新報によると「東日本大震災と福島第1原発事故の避難生活の長期化などで亡くなった福島県の震災関連死の犠牲者が11月30日現在で1605人に上り、津波による直接死の1603人を上回ったことが県のまとめで分かった。(中略)関連死は岩手県が428人、宮城県が878人と犠牲者全体の1割に満たず、原発事故を抱える福島県が突出している。」²⁾

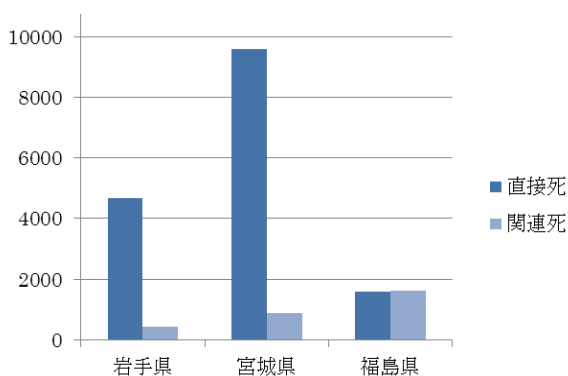


図 2-1 被災3県の震災関連死と直接死 2013.11.30
河北新報²⁾のデータを元に筆者作図

原因としては、避難生活の長期化に加え、生活再建の道が見えない放射能ストレスが言われている。がれきの除去や、住居の再建など目に見える課題の解決だけではなく、放射能という見えない壁による閉塞感が大きいという。

吉田理事長はまた、避難先に借り上げ住宅が多いことが、避難者の組織化を難しくし、孤立を深めていると指摘する。仮設住宅がベストとは言えないが、分散しているため個々の借り上げ住宅を廻りきれないなど、支援の手が届きにくい状況を生んでいるという。



図 2-2 いわき市内に設置されている仮設住宅 MAP
(平成25年3月現在 約36地区)

出所：ザ・ピープル『3.11 東日本大震災を越えて・・・』

2. ふくしまオーガニックコットンプロジェクトの誕生

震災から1年後の2012年、原発事故の放射能汚染がもたらす農作物に対する不安や風評被害によって、トマトを中心とするいわき市の農業が壊滅的打撃を受け、耕作を断念する農家が続出した。また沿岸部では、津波による塩害を受けた農耕地もあった。耕作放棄地の増加は地元経済の崩壊のみでなく、農地に生息していた微生物が失われ、自然の生態系が崩れる懸念があった。そこで、食用作物ではない綿花ならば風評被害を受けにくいだろうと、ふくしまオーガニックコットンプロジェクトが始まった。「食用でなく、塩害にも強く、放射性物質の移行係数が低い」³⁾とされる綿花を有機栽培で育て、収穫されたオーガニックコットンを製品化する、いわゆる6次産業化をめざす一連の事業モデルを構築し、地域に活気と仕事を生み出す。また市民参加型のプロジェクトとして、多様な参加者を募り、協働しながら福島の復興をめざすという計画である。

その母体となったのが、20年以上いわき市で古着のリサ

東日本震災復興支援に学ぶエシカルファッション教育

イクルに携わってきた NPO 法人「ザ・ピープル」であり、日本のオーガニックコットンアパレルの草分けである株式会社アバンティが協力し、綿花栽培の研究をしている信州大学繊維学部が日本在来種の茶綿の綿を提供した。和綿は、世界の綿花生産の 9 割を占めるアップランド綿（米綿）に比べると生産効率は悪いが、害虫に強く、殺虫剤や農薬を使わないオーガニック栽培でも比較的栽培がしやすいとされている。また綿花栽培は亜熱帯が適地と言われるが、かつて栽培されていた和綿は日本の気候に即している。こうやってプロジェクトは第 3 セクターと産・学の協働事業としてスタートした。

3. ふくしまオーガニックコットンプロジェクトの活動

特徴は、母体であるザ・ピープルの古着リサイクルの理念「循環型」にある。持続的に運営していける仕組み作りとして、震災前から活動を行ってきた 3 つの NPO が集まり「いわきおてんと SUN プロジェクト」を立ち上げ、

- ①オーガニックコットン
- ②コミュニティ電力
- ③復興スタディツアー

の 3 本柱で相互に連携を強めながら、活動を開始した。例えば、オーガニックコットン栽培には非常に多くの人手が必要だが、体験ツアーでボランティアを確保しつつ、支援を訴える、収穫されたコットンを綿と種に分けるための綿繰りでは、太陽光発電を採用し照明は発光ダイオード（LED）にするなど、ヨコの連携が活きている。

また、耕作地は農家から提供を受け、15 カ所でスタートし、2013 年には 37 カ所に増えている。

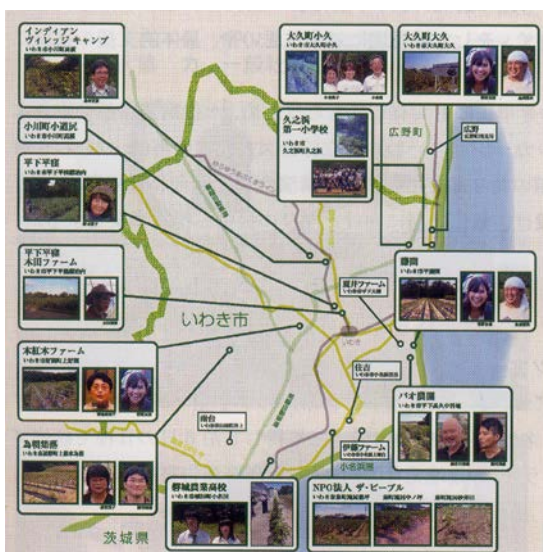


図 3-1 ふくしまオーガニックコットン栽培地
出所：ザ・ピープル『3.11 東日本大震災を越えて・・・』



図 3-2 ふくしまオーガニックコットン栽培地
伊藤ファーム（2013.11.22 筆者撮影）

栽培の規模・収穫も、下表のように順調に伸びている。

表 3-1 プロジェクトの栽培規模と収穫

年度	栽培地	栽培面積	ボランティア	収穫
2012 年	15 カ所	1.5ha	1,500 人	300kg
2013 年	37 カ所	3.0ha	3,000 人以上	900kg ～1200kg

（いわきおてんと SUN プロジェクト提供：2013 年 11 月）

製品については、2013 年度はオーガニックコットンの人形「オーガニックコットンベイク」5,000 個に加え、T シャツ 3,000 枚を販売予定という。このオーガニックコットンベイクというのは、綿花の種がはいったままの茶綿 1 個をそのまま使った人形で、購入者はパッケージ中面の栽培方法を読み、翌年春にその種を播き、綿花を育て、秋に収穫した綿の実をザ・ピープルに送り返すと、それが製品化されてまた他の購入者の手に渡るといふ、まさに循環型の商品である。オーガニックコットンを一緒に育てることで、購入者がふくしまと継続的に繋がりを持つという、新しい支援の形がそこにはある。



図 3-3 ふくしまオーガニックコットンベイク
（出所：いわきおてんと SUN プロジェクトチラシ）

そして「ねんねちゃん」(写真左)は障害者施設利用者の仕事として、「キャップちゃん」(写真右)は地域の女性たちや避難してきた女性たちの手仕事として製作されている。作業を通じて被災者の現金収入の道を作ると同時に、被災者と地域住民が集まって作業することで、孤立化を防ぎ会話を作り出すことに貢献している。帽子やおくるみの生地は、株式会社アバンティからオーガニックコットン製品の残布が提供されている。「キャップちゃん」は帽子のデザインを変えたり、リボンを変えたり、製作者の工夫が商品に活かされることで、手を動かしながら頭の体操も兼ねているようだ。

4. エシカルファッション教育への導入について

エシカルファッション教育としては、生活デザイン学科「デザイン概論」の講義で「フェアトレードとオーガニックコットン」「ファッション・リサイクル」を取り上げている。岐阜市図書館別館「ファッションライブラリ」での公開講座でも「エシカルファッションを着る」をとりあげているが、座学だけでなく、ワークショップ形式を取り入れることで、問題を身近に捉えることをめざせるのではないかと考えた。

そこで、毎年参加している岐阜市図書館別館「ファッションライブラリ」の「FL オリジナルコレクション」イベントに、今年はファッションデザイン専修1年有志によるオーガニックコットンの手作りクリスマスオーナメントを制作した。株式会社アバンティがソーシャルビジネスとして取り組んでいる「オーガニックコットンベイブ」や「東北グランマの仕事づくり」の手縫いのクリスマスオーナメントやお守りに触発されて、「絆のクリスマスツリー」と題して13名が制作した39個のオーナメントを飾った。



図 4-1 「絆のクリスマスツリー」

生地提供：ザ・ピープル、株式会社アバンティ

制作にあたり学生は、コットン生産の問題点やオーガニックコットンについて学び、被災地の写真を見て、被災地と繋がるという支援のあり方について考えを深めた。学生は残布の使い廻しを工夫し、思い思いに手作りの装飾を加えて制作していた。

また、昨年度からハートフルスクエアG開設記念イベント「ハートフルフェスタ」で「エシカルファッションショー in GIFU」を、フェアトレードアパレル「ピープルツリー」の協力で開催している。今年度も1月26日(日)に開催予定であるが、このファッションショーは学生が制作した作品ではなく、フェアトレード製品と各自の手持ちアイテムをコーディネートして、チーム毎にストーリーを付けて発表するというもので、コーディネート力を付けると同時に、フェアトレード製品を知り、各自の生活の中に取り入れることを学ぶ機会となっている。

このように「もの作り」を方法として捉えるのではなく、その背景を知り、活用し使いこなすことを学ぶことで、エシカルファッションの根底に流れる、社会で起きている諸問題に思いを致すことに繋がるのではないかと。松本三和夫が『構造災』で述べているように「他人事でないにもかかわらず他人事にしてくれている社会の仕組みのどこが問題であるかが人々の腑に落ちないかぎり、福島原発事故の問題はけっして収束しない。」(松本、2012: iv)。つまり震災復興支援を考えることが、エシカルファッション、さらには持続可能な社会をめざすことに繋がっていくのである。

■謝辞

調査にご協力いただき、さらにオーガニックコットン製品の残布・生地を提供して頂いたザ・ピープル吉田理事長、株式会社アバンティ渡邊社長に謝意を表する。

■注

- 1) 2014年1月1日 福島民友新聞掲載、2014.1.1 取得。
<http://www.minyu-net.com/news/news/0101/news11.html>
- 2) 2014年12月19日 河北新報掲載、2014.1.1 取得。
<http://www.kahoku.co.jp/news/2013/12/20131219t63030.htm>
- 3) ふくしまオーガニックコットンプロジェクト web サイトより2013年11月24日取得。<http://doyoucotton.jimdo.com/>

■参考文献

NPO 法人ザ・ピープル、2013年、『3.11 東日本大震災を越えて…いわき市小名浜地区における支援活動と今後の展望』

松本三和夫、2012年、『構造災 科学技術社会に潜む危機』岩波新書

(提出日 平成25年1月10日)